

2006年9月

全国の20～59歳の女性888名に聞いた 『女性特有の病気に関するアンケート調査』

～20代と30代女性の約8割が「乳がん」「子宮がん」「子宮筋腫・子宮内膜症」に不安を感じている～

第一生命保険相互会社（社長 斎藤 勝利）のシンクタンク、（株）第一生命経済研究所（社長 石嶺 幸男）では、全国に居住する20～59歳の女性888名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

＜調査結果のポイント＞

女性特有の病気に対する検診の受診状況と心理的抵抗 (P2～4)

- 子宮がん検診の受診割合は高く、30代以上では過半数が過去3年以内に受診している。
- 乳がん検診の受診割合は40代と50代で高いが、視触診の受診割合が4割以上なのに対し、マンモグラフィは約3割と、両者の間には差がある。
- 子宮がんと子宮筋腫・子宮内膜症の検診の受診割合は、全ての年代において、既婚女性よりも未婚女性の方が低い。
- 年代、婚姻形態、子どもの有無等にかかわらず、生殖器疾患にかかわる診察や治療には、8割以上の女性が抵抗を感じている。

女性特有の病気に関する経験 (P5)

- 子宮筋腫・子宮内膜症が最も多く、全体の約4人に1人は「疑われた、または罹ったことがある」経験があり、50代では3人に1人の割合にのぼる。
- 乳がんについては、40代と50代女性の約1割は経験がある。

女性特有の病気に対する理解状況 (P6～8)

- 乳がんについては、「乳房の専門科は乳腺科で外科にある」ことを4割の女性は全く知らない。
- 子宮がんについては、「子宮頸部がんの市町村検診は20歳以上が対象である」ことを過半数の女性は全く知らない。

女性特有の病気についての情報源 (P9)

- 「新聞・雑誌」や「テレビ・ラジオ」などのマスメディアが中心で、「学校教育」はほとんどない。

女性特有の病気に対する不安 (P10～12)

- 乳がん、子宮がん、子宮筋腫・子宮内膜症、全てにおいて、年代が低い女性ほど不安を感じており、20代と30代では約8割にも及ぶ。
- 乳がんでは「自分の外観が変わるのではないか」、子宮がんと子宮筋腫・子宮内膜症では「痛みや苦痛があるのではないか」といった不安が最も高く、7割以上の女性が不安を感じている。

＜お問い合わせ先＞

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当 (丹野・新井)
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

☆本報告書の詳細は、当研究所から隔月発行している『ライフデザインレポート』7-8月号、及び9-10月号に掲載しています。レポートご希望の方は、左記の広報担当、またはホームページからお申し込みください。

《アンケート調査の実施概要》

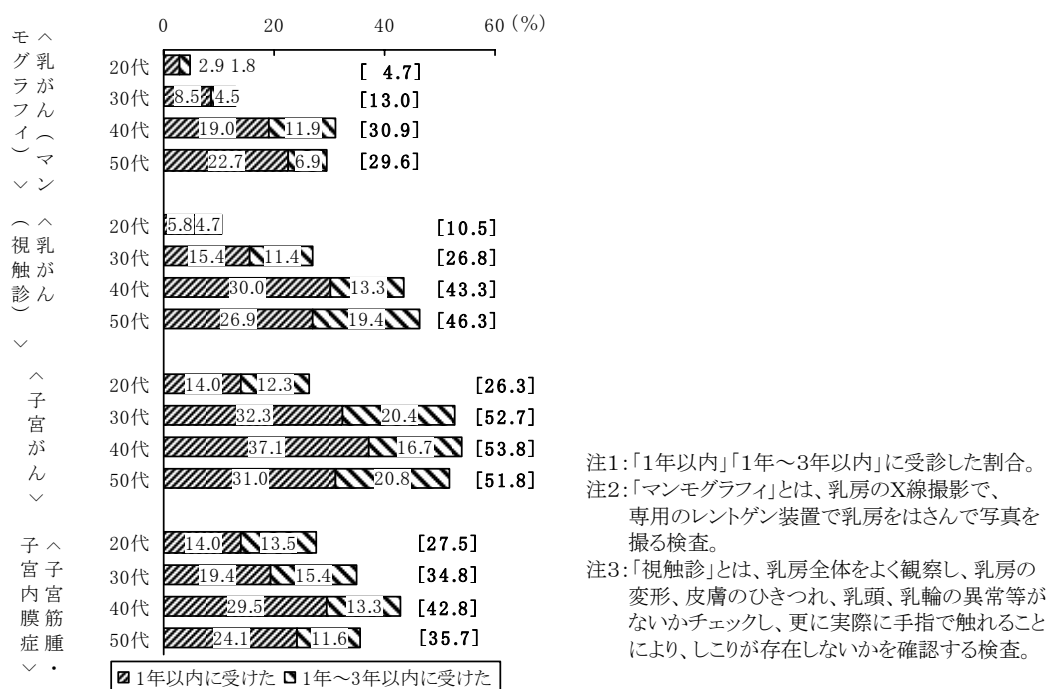
1. 調査地域と対象 全国に居住する 20～59 歳の女性
2. サンプル数 888 名
3. サンプル抽出方法 第一生命経済研究所生活調査モニター
4. 調査方法 質問紙郵送調査法
5. 実施時期 2005 年 11 月～12 月
6. 有効回収数(率) 820 名 (92.3%)
7. 回答者の属性

	(単位: %)				
	全体(n=820)	20代(n=172)	30代(n=200)	40代(n=210)	50代(n=216)
【婚姻形態】					
未婚	22.7	47.7	28.0	20.0	1.4
既婚	65.2	50.6	63.5	64.3	83.8
離別または死別	10.1	1.2	8.5	15.7	14.4
【就労形態】					
フルタイムの勤め人	30.0	32.0	35.5	31.0	23.6
アルバイト・パート	21.8	21.5	18.5	23.8	25.0
契約・嘱託社員	4.8	5.2	2.0	6.7	5.6
派遣社員	3.5	4.7	6.0	2.9	0.9
自営業・家族従業者	6.2	1.7	0.0	9.5	12.5
自由業・フリーランス	1.2	0.0	0.5	3.8	0.5
その他	0.7	0.0	0.0	1.4	1.4
無職	29.5	34.3	36.5	21.0	30.1

女性特有の病気に対する検診の受診状況(年代別)

「子宮がん」検診の受診割合は高く、30代以上では過半数が過去3年以内に受診している。「乳がん」検診では、40代と50代の受診割合は高いが、視触診の4割以上に対し、マンモグラフィは約3割と差がある。

図表1 女性特有の病気に対する検診の受診状況(年代別)



「乳がん」や「子宮がん」、「子宮筋腫・子宮内膜症」などの女性特有の病気に対する検診の受診状況を尋ねました。

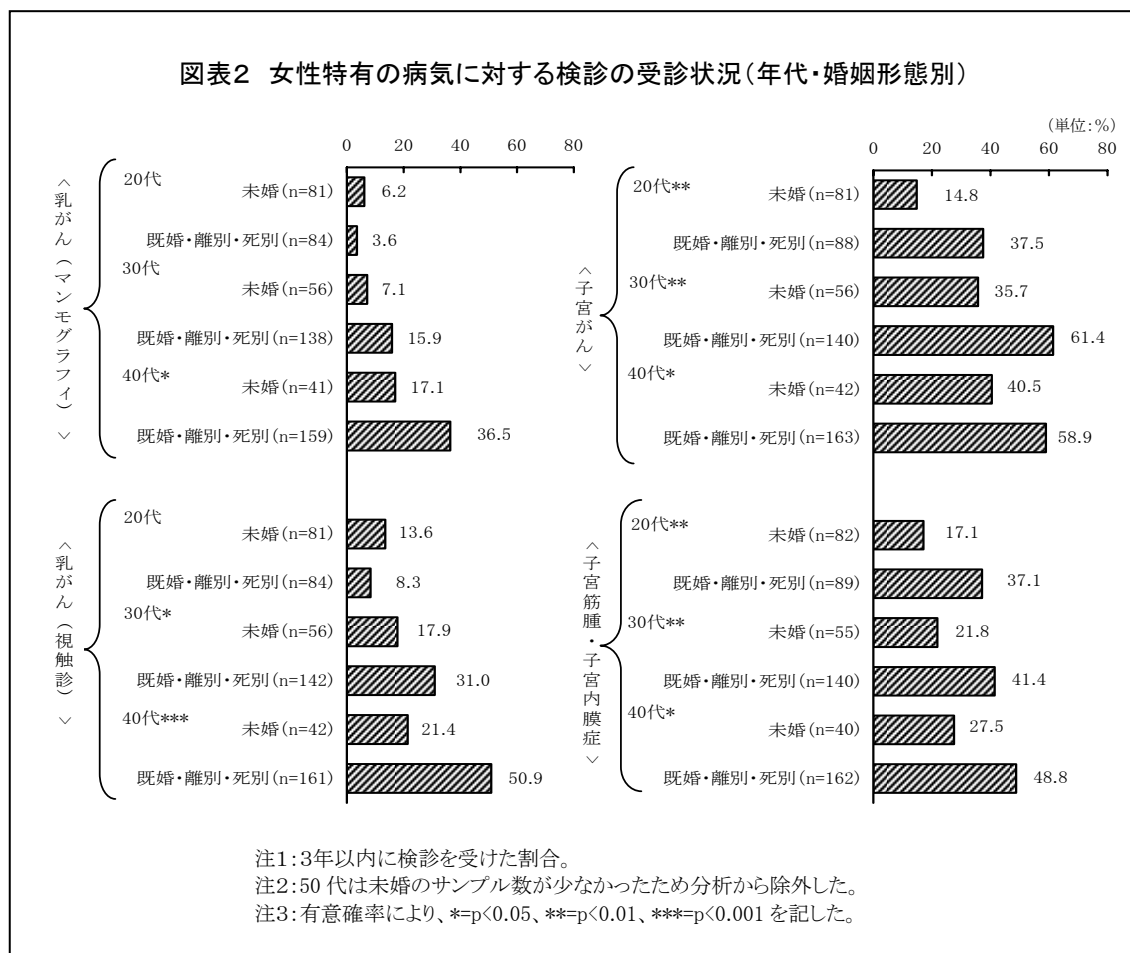
その結果、年代別にみると、受診割合が高かったのは「子宮がん」検診で、「1年以内に受けた」または「1年～3年以内に受けた」割合を合計すると、30代(52.7%)、40代(53.8%)、50代(51.8%)では過半数が受診していましたが、20代では26.3%と低いことがわかりました。

「乳がん」検診については、全ての年代において、「マンモグラフィ」よりも「視触診」の受診割合の方が高いことがみてとれます。特に、40代と50代においては、「視触診」は過去3年以内に4割以上が受診していますが、より精度が高いとされる「マンモグラフィ」は約3割しか受診していません。また、厚生労働省の指針では、40代以上を乳がん（「視触診」「マンモグラフィ」ともに）検診の実施対象年齢としているために、20代と30代においては、「マンモグラフィ」「視触診」ともに受診割合が低くなっていることがみてとれます。

「子宮筋腫・子宮内膜症」の検診については、過去3年以内の受診割合が最も高いのは40代(42.8%)であることがわかりました。

女性特有の病気に対する検診の受診状況(年代・婚姻形態別)

「子宮がん」と「子宮筋腫・子宮内膜症」の検診の受診割合は、全ての年代において、既婚・離別・死別の女性よりも、未婚女性の方が低い。



女性特有の病気に対する検診を3年以内に受診した割合について、年代と婚姻形態別にみました。

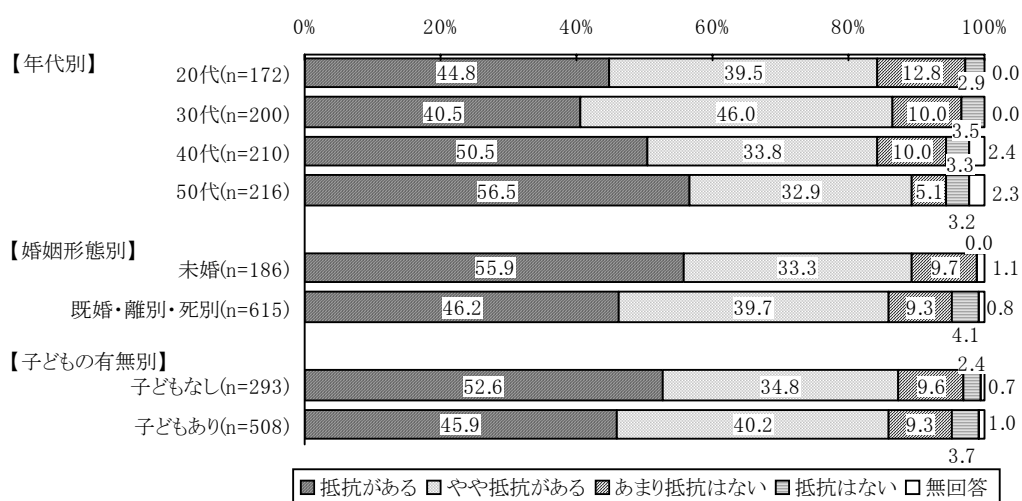
その結果、「子宮がん」と「子宮筋腫・子宮内膜症」の検診の受診割合は、全ての年代で未婚女性の方が低いことがわかりました。特に、30代の「子宮がん」検診の受診割合は、未婚の35.7%に対して既婚・離別・死別では61.4%と大きな差があります。「子宮がん」は全ての年代で、「子宮筋腫・子宮内膜症」は20代と30代で、子どもがいない女性よりもいる女性の方が受診割合が高いことから(図表省略)、妊娠や出産にかかわる検診やその経験が、「子宮がん」や「子宮筋腫・子宮内膜症」の検診の受診割合を高めていると思われます。

また、「乳がん」においても、「マンモグラフィ」の40代(17.1%)、「視触診」の30代(17.9%)と40代(21.4%)では、それぞれ既婚・離別・死別の女性に比べて未婚女性の受診割合の方が低いことがみてとれます。

生殖器疾患にかかわる診察・治療への心理的抵抗

「抵抗がある」と「やや抵抗がある」をあわせると、年代別、婚姻形態別、子どもの有無別にかかわらず、8割以上の女性が抵抗を感じている。心理的抵抗がより強い「抵抗がある」と回答した割合は、“年代が高い女性”“未婚女性”“子どもがいない女性”において高い傾向がある。

図表3 生殖器疾患にかかわる診察・治療への心理的抵抗
(年代別、婚姻形態別、子どもの有無別)



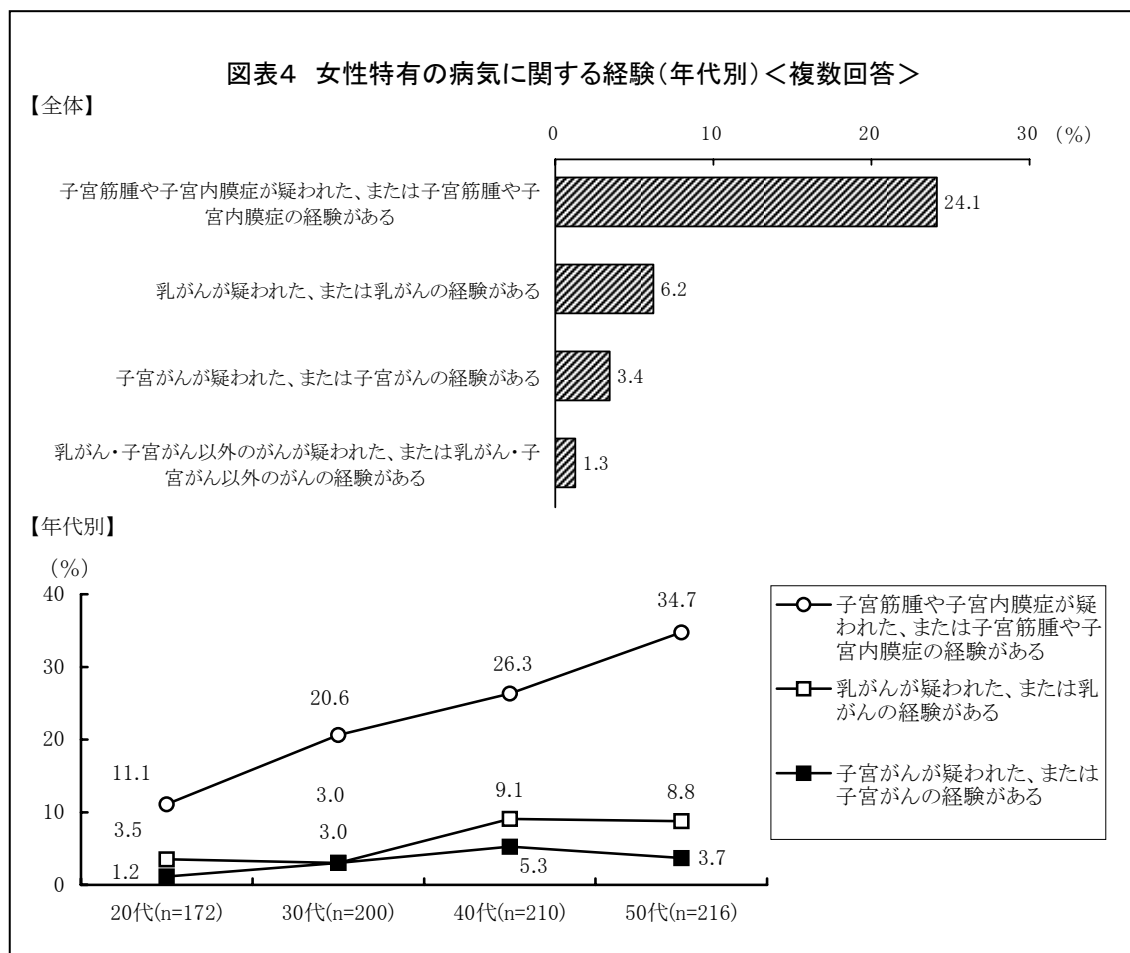
「子宮がん」や「子宮筋腫・子宮内膜症」など、生殖器疾患にかかわる診察・治療に対して心理的抵抗があるかどうか、を尋ねました。

その結果、「抵抗がある」と「やや抵抗がある」をあわせた割合をみると、年代別、婚姻形態別、子どもの有無別にかかわらず、8割以上の女性が抵抗を感じており、女性にとって生殖器疾患にかかわる診察・治療への心理的抵抗は非常に強いことがわかりました。

年代別、婚姻形態別、子どもの有無別についてそれぞれをみると、「抵抗がある」と「やや抵抗がある」をあわせた回答割合に大きな差はみられません。しかし、心理的抵抗がより強い「抵抗がある」と回答した割合については、年代別では年代が上がるほど、婚姻形態別では未婚女性で、子どもの有無別では子どもがいない女性において高い傾向がみとれます。

女性特有の病気に関する経験

最も多いのは「子宮筋腫・子宮内膜症」で、全体では約4人に1人、50代では3人に1人が経験有。「乳がん」は40代と50代で1割近くが経験有。



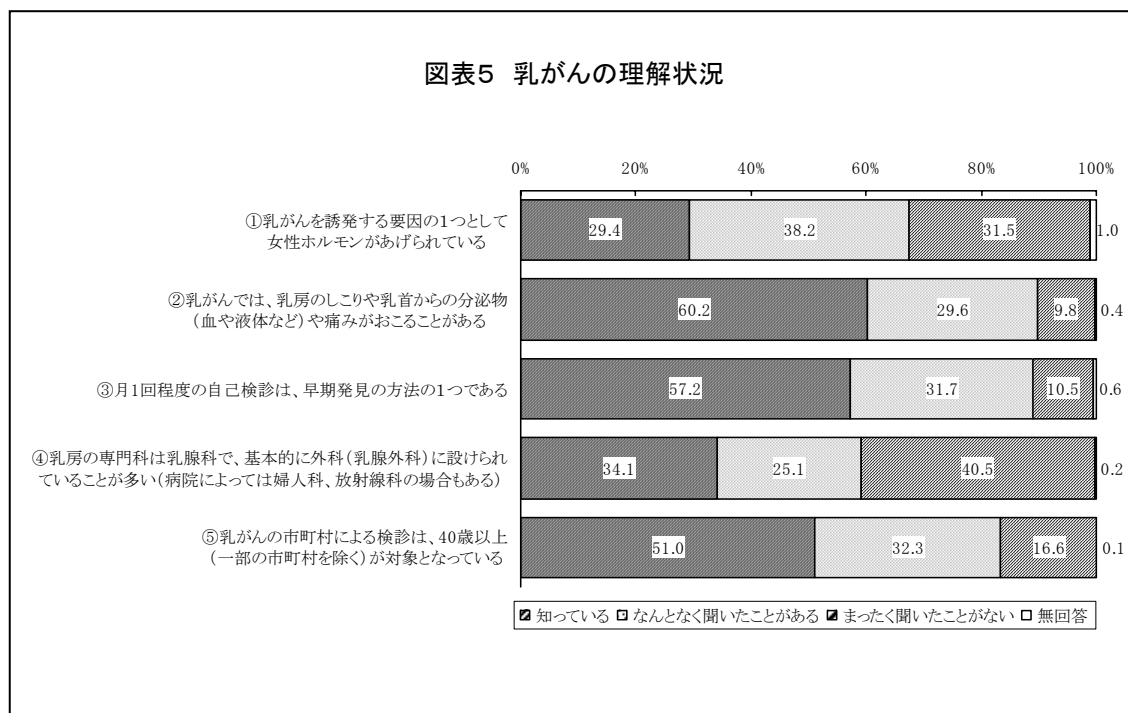
女性特有の病気について、罹患した経験がある、または罹患が疑われたことがあるかどうか、を尋ねました。

その結果、最も多かったのは「子宮筋腫や子宮内膜症が疑われた、または子宮筋腫や子宮内膜症の経験がある」(24.1%)で、約4人に1人が経験していることがわかりました。また、がんについては、多い順に「乳がんが疑われた、または乳がんの経験がある」(6.2%)、「子宮がんが疑われた、または子宮がんの経験がある」(3.4%)、「乳がん・子宮がん以外のがんが疑われた、または乳がん・子宮がん以外のがんの経験がある」(1.3%)でした。

年代別にみると、「子宮筋腫や子宮内膜症が疑われた、または子宮筋腫や子宮内膜症の経験がある」の割合は、20代(11.1%)、30代(20.6%)、40代(26.3%)、50代(34.7%)と年代が上がるほど高くなり、50代では3人に1人が経験しています。また、「乳がん」については、40代(9.1%)と50代(8.8%)において約1割の女性が経験していました。

女性特有の病気に対する理解状況(乳がん)

「②乳房のしこりや乳首からの分泌物や痛みがおこる」や「③月1回の自己検診は早期発見の方法の1つである」ことは、約6割の女性が知っており、理解度は比較的高い。その一方で、「④乳房の専門科は乳腺科で、外科に設けられている」ことを知っている女性は、3人に1人しかいない。



女性特有の病気に対する理解状況について尋ねました。

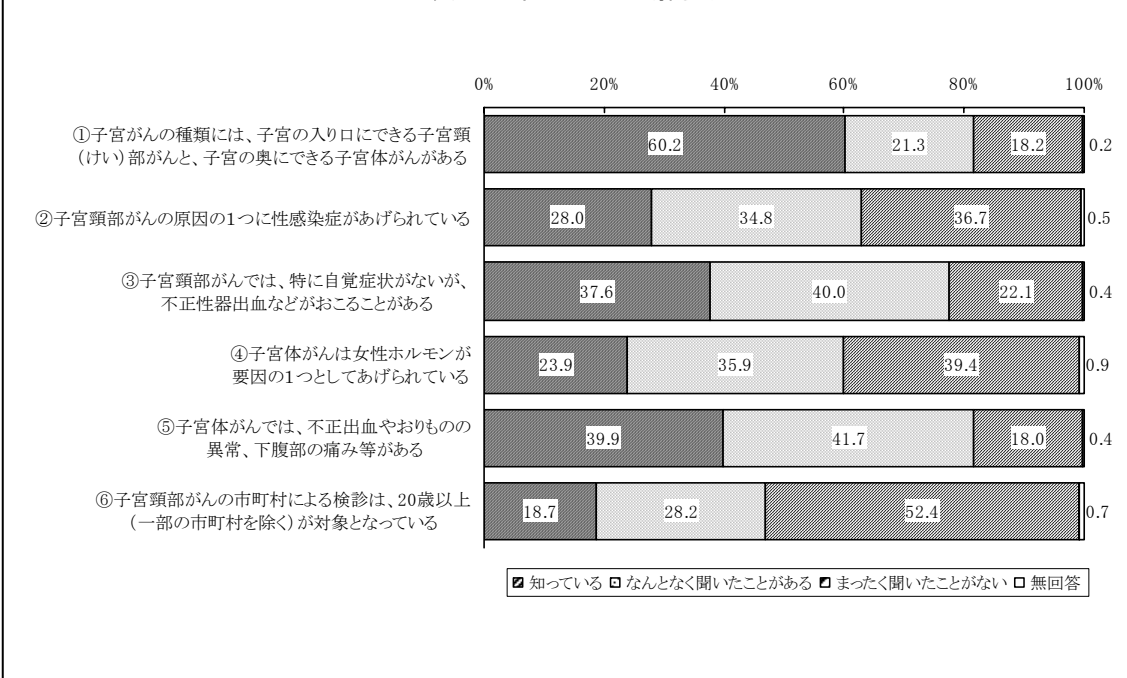
「乳がん」についてみると、「知っている」と回答した割合が高いのは、「②乳がんでは、乳房のしこりや乳首からの分泌物や痛みがおこることがある」(60.2%)や「③月1回程度の自己検診は、早期発見の方法の1つである」(57.2%)で、約6割でした。また、「⑤乳がんの市町村による検診は、40歳以上が対象となっている」(51.0%)に関しては、過半数が知っていました。

その一方で、「①乳がんを誘発する要因の1つとして女性ホルモンがあげられている」(29.4%)や「④乳房の専門科は乳腺科で、基本的に外科(乳腺外科)に設けられていることが多い」(34.1%)に関しては、「知っている」割合は3割前後にとどまりました。特に、「④乳房の専門科は乳腺科で、基本的に外科(乳腺外科)に設けられていることが多い」に関しては、「まったく聞いたことがない」(40.5%)割合が高く、女性の4割が知らないことがわかりました。

女性特有の病気に対する理解状況(子宮がん)

「①子宮がんには、子宮頸部がんと子宮体がんの2つがある」こと
の理解度が最も高く、6割の女性が知っている。その一方で、「⑥子宮頸部
がんの市町村による検診は、20歳以上が対象である」ことの理解度は
低く、知っている女性は約5人に1人しかおらず、過半数が全く知らない。

図表6 子宮がんの理解状況



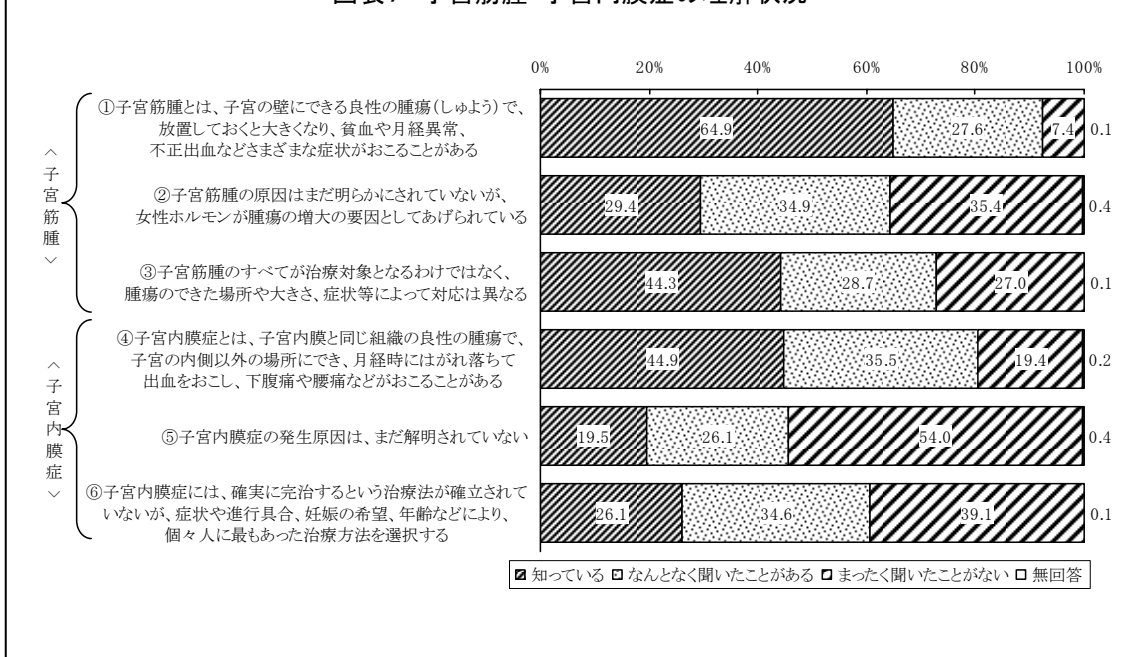
次に、「子宮がん」についてみると、「知っている」割合が最も高いのは、「①子宮がんの種類には、子宮の入り口にできる子宮頸部がんと、子宮の奥にできる子宮体がんがある」(60.2%)で、6割の女性が知っていました。

その一方で、「知っている」割合は、「③子宮頸部がんでは、特に自覚症状がないが、不正性器出血などがおこることがある」(37.6%)や「⑤子宮体がんでは、不正出血やおりものの異常、下腹部の痛み等がある」(39.9%)では約4割、「②子宮頸部がんの原因の1つに性感染症があげられている」(28.0%)や「④子宮体がんは女性ホルモンが要因の1つとしてあげられている」(23.9%)では3割未満、にとどまりました。また、「知っている」割合が最も低いのは「⑥子宮頸部がんの市町村による検診は、20歳以上が対象となっている」(18.7%)で、約5人に1人しかおらず、過半数の女性が「まったく聞いたことがない」(52.4%)ことがわかりました。

女性特有の病気に対する理解状況(子宮筋腫・子宮内膜症)

「②子宮筋腫の原因はまだ明らかにされていないが、女性ホルモンが腫瘍の増大の要因である」ことを知っている女性は3割、「⑤子宮内膜症の発生原因は、まだ解明されていない」ことを知っている女性は2割しかない。全体的に、子宮内膜症よりも子宮筋腫の方が理解度は高い。

図表7 子宮筋腫・子宮内膜症の理解状況



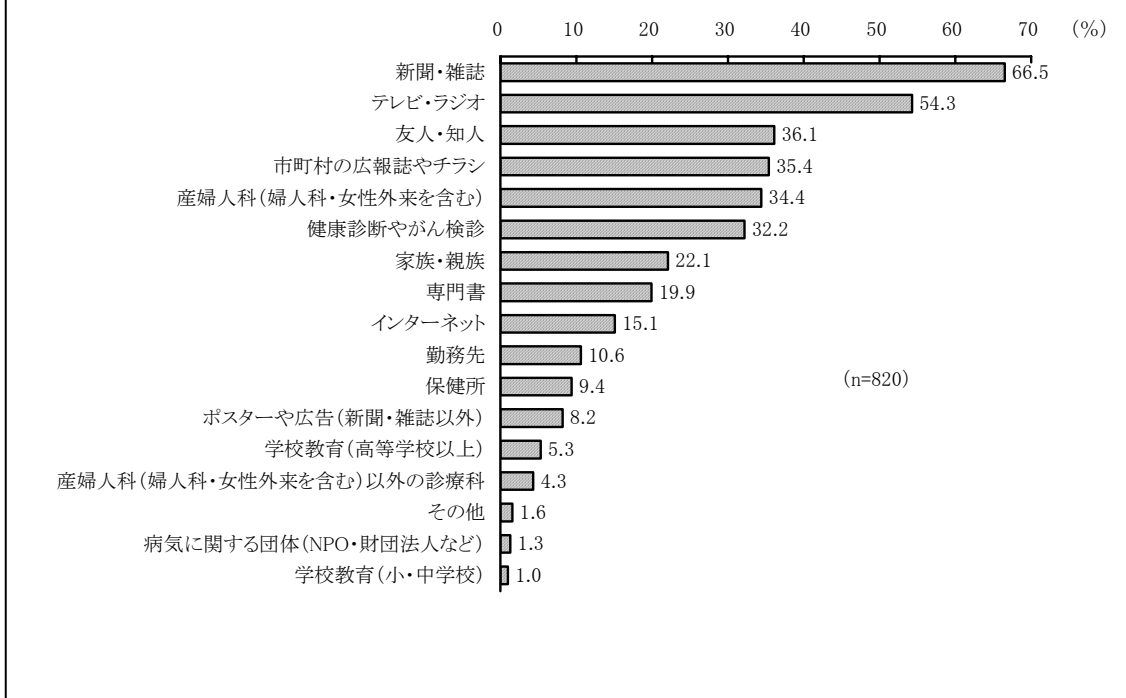
次に、「子宮筋腫」についてみると、「知っている」割合が最も高いのは、「①子宮筋腫とは、子宮の壁にできる良性の腫瘍で、放置しておくと大きくなり、貧血や月経異常、不正出血などさまざまな症状がおこることがある」(64.9%)で、6割以上の女性が知っていました。その一方で、「③子宮筋腫のすべてが治療対象となるわけではなく、腫瘍のできた場所や大きさ、症状等によって対応は異なる」(44.3%)は4割、「②子宮筋腫の原因はまだ明らかにされていないが、女性ホルモンが腫瘍の増大の要因としてあげられている」(29.4%)は約3割、にとどまりました。

「子宮内膜症」についてみると、「知っている」割合が最も高いのは、「④子宮内膜症とは、子宮内膜と同じ組織の良性の腫瘍で、子宮の内側以外の場所にでき、月経時にはがれ落ちて出血をおこし、下腹痛や腰痛などがおこることがある」(44.9%)でした。次いで、「⑥子宮内膜症には、確実に完治するという治療法が確立されていないが、症状や進行具合、妊娠の希望、年齢などにより、個々人に最もあった治療方法を選択する」(26.1%)が3割弱、「⑤子宮内膜症の発生原因は、まだ解明されていない」(19.5%)が約2割と、いずれも子宮筋腫に比べて子宮内膜症の方が「知っている」割合は低い傾向にあります。

女性特有の病気についての情報源

「新聞・雑誌」(66%)や「テレビ・ラジオ」(54%)などマスメディアが中心。
「学校教育(高等学校以上)」(5%)や「学校教育(小・中学校)」(1%)
によって情報を得た女性はほとんどいない。

図表8 女性特有の病気についての情報源＜複数回答＞



女性特有の病気についての情報源は何か、をたずねました。

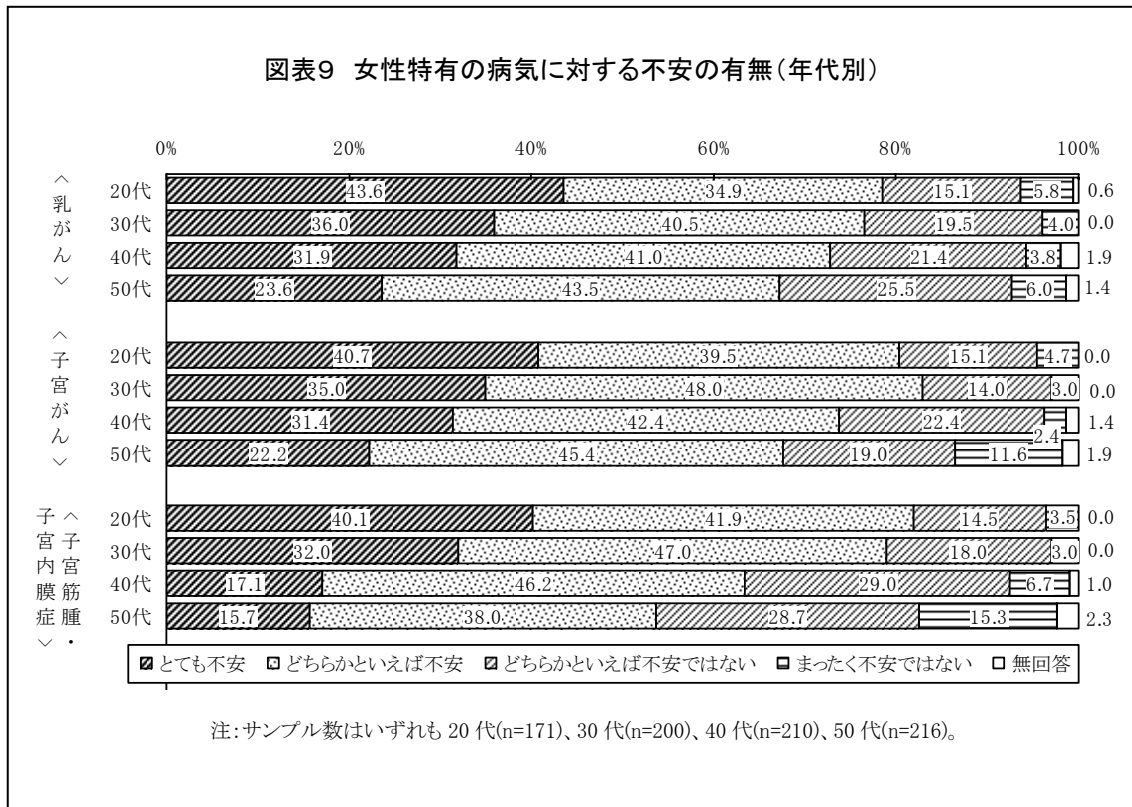
その結果、「新聞・雑誌」(66.5%)が最も多く、次いで「テレビ・ラジオ」(54.3%)と、マスメディア中心となりました。

このような中で、「友人・知人」(36.1%)、「市町村の広報誌やチラシ」(35.4%)、「産婦人科」(34.4%)、「健康診断やがん検診」(32.2%)も3割以上と、重要な情報源となることがみてとれます。

その一方で、「学校教育(高等学校以上)」(5.3%)や「学校教育(小・中学校)」(1.0%)など、学校教育によって情報を得た女性はほとんどいないこともわかりました。

女性特有の病気に対する不安の有無

「乳がん」「子宮がん」「子宮筋腫・子宮内膜症」全てにおいて、年代が低い女性ほど不安を感じており、20代と30代では8割前後にも及ぶ。「子宮筋腫・子宮内膜症」に対しては、40代と50代の不安が特に低い。



女性特有の病気に対する不安の有無について尋ねました。

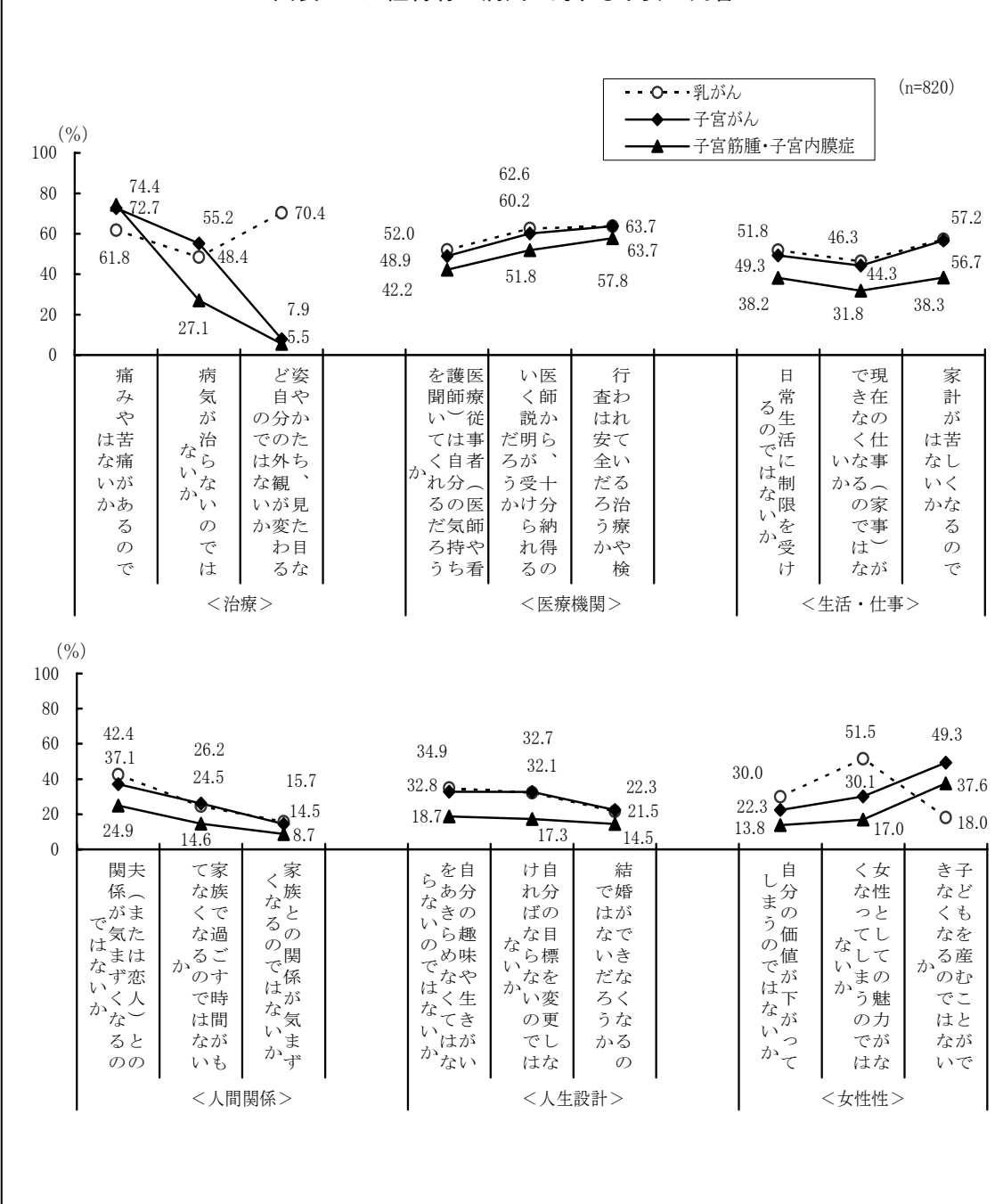
その結果、「乳がん」「子宮がん」「子宮筋腫・子宮内膜症」全てにおいて、年代が低い女性ほど“不安”（「とても不安」＋「どちらかといえば不安」）と回答した割合は高くなる傾向がみてとれます。特に、20代と30代においては、“不安”と回答した割合がそれぞれ8割前後もあり、これらの年代の女性の多くが不安を感じていることがわかりました。

また、40代と50代の“不安”と回答した割合をみると、「乳がん」や「子宮がん」に比べて、「子宮筋腫・子宮内膜症」では特に低くなり、年代が上がるとこれらに対する不安が低くなることがみてとれます。

女性特有の病気に対する不安の内容

「乳がん」では、「自分の外観が変わるのではないか」(70%)、
「子宮がん」と「子宮筋腫・子宮内膜症」では、「痛みや苦痛があるのではないか」(72%・74%)に対する不安が最も高い。

図表 10 女性特有の病気に対する不安の内容



最後に、女性特有の病気に対する不安の内容を尋ねました。

「乳がん」への不安として最も高かったのは、「姿やかたち、見た目など自分の外観が変わるのではないか」(70.4%)でした。次いで、「行われている治療や検査は安全だろうか」(63.7%)、「医師から、十分納得のいく説明が受けられるだろうか」(62.6%)、「痛みや苦痛があるのではないか」(61.8%)などが多く、治療や医療機関への不安も高いことがわかりました。その一方で、「家計が苦しくなるのではないか」(57.2%)といった経済的な不安や、「女性としての魅力がなくなってしまうのではないか」(51.5%)といった女性性への不安、「夫（または恋人）との関係が気まずくなるのではないか」(42.4%)といった人間関係などに不安を抱く女性も少なくないことがみてとれます。

「子宮がん」への不安として最も高かったのは、「痛みや苦痛があるのではないか」(72.7%)でした。次いで、「行われている治療や検査は安全だろうか」(63.7%)、「医師から、十分納得のいく説明が受けられるだろうか」(60.2%)、「家計が苦しくなるのではないか」(56.7%)、「病気が治らないのではないか」(55.2%)などが多く、「乳がん」と同様に治療や医療機関、経済的な不安が高いことがわかりました。また、「夫（または恋人）との関係が気まずくなるのではないか」(37.1%)も「乳がん」と同様の傾向がみられます。さらには、生殖器にかかわる病気であることから、「子どもを産むことができなくなるのではないか」(49.3%)といった不安も高いことがみてとれます。

「子宮筋腫・子宮内膜症」への不安として最も高かったのは、「子宮がん」と同様に「痛みや苦痛があるのではないか」(74.4%)でした。次いで、「行われている治療や検査は安全だろうか」(57.8%)、「医師から、十分納得のいく説明が受けられるだろうか」(51.8%)も高く、医療機関への不安は「乳がん」や「子宮がん」と同様に高いことがわかりました。また、「病気が治らないのではないか」(27.1%)については、「乳がん」や「子宮がん」に比べて低い一方で、女性性への不安では、「子宮がん」と同様に「子どもを産むことができなくなるのではないか」(37.6%)といった不安が高いことがみてとれます。

《研究員のコメント》

女性特有の病気に対する不安は、「乳がん」では姿やかたちなどの外観の変化について、「子宮がん」と「子宮筋腫・子宮内膜症」では痛みについて、それぞれ7割以上の女性が不安を抱いていました。いずれの病気でも、行われている治療や検査の安全性、医師から納得のいく説明が受けられるか、医療従事者は自分の気持ちを聞いてくれるかなど、医療機関にかかわる不安も高いことがわかりました。

また、「乳がん」と「子宮がん」では、経済的な不安を抱く女性が約6割、日常生活の制限や仕事・家事の継続に不安を抱く女性も約半数みられました。女性性については、「乳がん」では女性としての魅力がなくなることによる不安を抱く女性が約半数、「子宮がん」と「子宮筋腫・子宮内膜症」では出産の可能性による不安を抱く女性が4割前後みられます。また、「乳がん」と「子宮がん」では、夫（または恋人）との関係による不安を抱く女性も約4割みられ、女性特有の病気に対する不安は治療や医療機関への不安だけにとどまりません。

このように、女性は病気に対して多岐にわたる不安を抱いています。これらの病気に対する不安を軽減するためには、どのようなことが必要とされるのでしょうか。

調査結果からは、女性特有の病気への不安は、「若年層」「未婚」「子どもがいない」「既往症の人が周囲にいない」女性において高いことがわかりました。このことから、病気に対する不安を抱いている若年層や未婚女性を中心に、病気に関する情報や検診の効果の伝達、検診による早期発見・早期治療の必要性を理解することなどの普及が必要と考えられます。

病気に対する不安と関連がみられたその他の要因は、「診察・検診が未受診」「病気の理解が低い」「生殖器疾患の診察・治療への心理的抵抗がある」でした。

「診察・検診が未受診」については、検診受診率は若年層や未婚女性で低いことが明らかとなっていることから、それらの機会を増やすことが不安の軽減につながるのではないかと考えられます。また、「病気の理解が低い」女性において「子宮筋腫・子宮内膜症」への不安が高かったことから、病気への理解度が低い「若年層」「未婚」「子どもがいない」「既往症の人が周囲にいない」女性に対し、情報を普及することによって不安を軽減させることが可能ではないかと推測されます。「生殖器疾患の診察・治療への心理的抵抗がある」女性は、「子宮がん」と「子宮筋腫・子宮内膜症」への不安が高いだけでなく、「診察・検診の未受診」とも関連していることから、多くの女性が抱いている診察・治療への心理的抵抗を低下させることが、不安の軽減にとって重要な要因であると考えられます。また、「生殖器疾患の診察・治療への心理的抵抗」を払拭するためには、検診受診の普及に加え、女医の育成、医師らへの研修や、医療機関による患者への配慮などの取組みも必要だと考えられます。

最後に、病気に関する情報源として学校教育と答えた女性はほとんどみられませんでした。が、病気に対する若年層の不安は高く、情報を得る機会を増やすためにも、女性特有の病気に関する保健教育の充実についても検討の余地があると思われます。

（研究開発室 副主任研究員 下開 千春）